

宇喜多家史談会会報

第 93 号
令和 7 年 1 月 17 日

宇喜多家史談会
〒七〇〇八二六
岡山市北区磨屋町六一二八
光珍寺気付

八浜合戦後の軍議に見える武士の生き方

岡山県立博物館 内 池 英 樹

小稿は、二〇二四年十一月二十日に光珍寺で行った講演を活字化したものです。間違えているかも知れませんが、二〇一三年の頃から、断続してお話しをしているようなので、一〇年以上良く続けられていると自分でも思っています。

二〇二二年に『現代語訳 備前軍記』（以下、「備前軍記」）を山陽新聞社から刊行して以降、「備前軍記」に掲載している内容をご紹介するようにしています。

今回は、一五八二年二月頃の八浜合戦の後に開かれた会議の様子を、「備前軍記」から読み込み、戦国時代の武士の考え方や生き方を紹介したいと思います。登場人物する人物は次の通りで、すべてが備前の戦国大名宇喜多氏の家臣です。

【登場人物】

戸川平右衛門（秀安）、馬場重介、寺尾孫四郎、鷹見伝兵衛、小森三郎右衛門

八浜合戦は、八浜城（玉野市八浜町八浜）に宇喜多軍が、常山城（玉野市庄内他）に毛利軍が集まり、現在の玉野市大崎付近で起こった戦いです。宇喜多軍大將の宇喜多元家（与太郎）は、この戦いの中で戦死してしまいました。

八浜合戦の後に常山城において開かれた軍議では、宇喜多軍で誰が活躍をしたのかを振り返ろうとしました。司会をしていた戸川平右衛門は、宇喜多軍の家老でした。馬場重介は、宇喜多軍でも年上の武士で、戦闘の経験も豊富でした。ここからは、馬場重介たちが

どのように、戦いを振り返っていったのかを見ていきたいと思います。なお、【あ】～【え】の場面については、「備前軍記」の三二〇～三二二ページに掲載されている現代語訳を元にしています。

【あ】馬場重介の回想

（軍議の場において）このとき馬場重介は、「あの防戦の場所まで殿軍を務め、味方の兵を引き揚げさせたのは某ひとりでござる。戸川殿が馬を立てられたその場に踏み留まって敵を討ち取ったのでござる」と語った。その時、寺尾孫四郎が口を挟み、「味方の先鋒が総崩れになったとき、重介殿が殿軍を務めたといわれるが、そのような姿など頓とお見掛けしなかった」と異論を唱えた。

【あ】では、宇喜多元家が討ち死にした後、「殿軍（部隊の最後を守る役割）」を果たしたのは、自分だったと馬場重介は述べています。ところが、寺尾孫四郎が「（重介）の姿を見ていないと述べます。『見た・見ていない』という水掛け論に発展しそうな場面ですが、すぐに馬場重介は反論を行います。

【い】馬場重介の反論

重介は即座に、「御辺はその時いずこに居られたか。某はそのとき敵三騎が追い縋ってくるのを突き払って引き取ったが、御辺はその馬の毛色を見覚えておられるか」と反論した。孫四郎は答えることができなかった。そこで重介は言葉を荒くして、「総崩れになった時、先を争って逃げた者には、追い来る敵の姿は見えないものだ」と孫四郎を叱った。

馬場重介は殿軍を務めながら、追いかけてくる馬に乗った武士三人と対決したと主張します。さらには、孫四郎はその馬の毛色を見